

中学校の部 特選

「声を挙げる」

藤井寺市立第三中3年 阪木みりさん

「わたしは、いなくなんて、なれないんだ。」このたった一行の言葉に心を揺さぶられ、すぐにこの本を手にとりました。この本に出会った時、読まなくても私と共通していると分かりました。この少女の言葉と私の心の声が全く同じだったからです。

中学三年生の悠人は、成績優秀な兄の直人と比べられてばかり。家庭内の会話はほぼゼロに近い。そんな悠人が日課にしているランニングで、真っ暗な夜、一人公園のブランコに腰かける朱音に出会います。自分より一つ年下の朱音が何故こんな時間にこの場所にいるのかが分からない悠人。そして少しずつ距離が近くなり、朱音の母親が病気の為、介護をしていることを知ります。まだ幼い妹、単身赴任中の父。「全てをかかえこんでいる朱音の力になりたい。」と、悠人は必死に朱音に会い、自分との共通点を見つけていきます。悠人は母に朱音のことを話すと、ヤングケアラーと言う言葉を教えてもらいます。そんな悠人は朱音のことが好きだと気付きます。毎日大変で、必要以上の重すぎる荷物を背負っている朱音に悠人は思いを伝え、悠人の母からのアドバイスで、朱音は学校にも相談し、父も単身赴任を終えて帰宅する。という物語です。

私はこの朱音の発言、行動に何度も何度も涙を流しました。ヤングケアラーに望んでなりたいたい人なんて誰一人としていないと思います。実際に私もヤングケアラーとして生きています。まさか自分の母親が、あんなに元気で毎日笑顔をくれた母親が、こうなってしまうなんて、私も想像できませんでした。この状況になって、もう少しで三年がたとうとしています。月日がたった今でも、本音を言えば、まだこの状況を受け入れられていないし、受け止めたくない自分がいます。ずっと時が止まっているようで、生活に支障が出ることもあります。私は一人っ子で、父は消防士です。その仕事柄、一度出勤すると次の日まで帰ってきません。すごく体力を使う仕事だから、少しでも私が家事を手伝います。同時に母の補助・介護にもあたります。一日の中で、一人で涙を流したり、もういなくなってしまうと思うことがよくあります。その思いは増えていくばかりです。「遊びに行っておいで」や「好きなことをしていいよ」と言われても、理由の分からないものすごく大きい罪悪感が押し寄せてくることがよくあります。たくさんの重い課題がある中、私が朱音にすごく共感した部分が二つあります。一つ目は、「主婦みたいに買い物をしたくない」と、朱音が悠人に話す場面です。ここにはあまりにも共感し、思わず声が出ました。ただのおつかいとは違う部分があると気付くことが最近増えました。言葉で表すことは、ものすごく難しく、なかなかできないけれど、胸がぐっと締めつけられるような思いになります。二つ目は、「いつもお手伝いしてえらいと言われたくてやってるんじゃないんだ!!」と、大きな声で言った場面です。ここは涙を流さずに読むことはできませんでした。「家のことをしてえらいね。」や、「いつも大変だね。がんばっているね。」などの言葉を、何十回、何百回と言われて過ごしてき

ました。しかし、これを言われても何も嬉（うれ）しくありません。言われたくて家事をしてるわけではないし、家事なんて、介護なんてもうやめたいとすら思うこともあります。だけど、その言葉をかけられることが、余計にプレッシャーになるし、変な責任にもつながるんだということを、私は身に染みて感じています。こうした状態が長く続いていて、いつ何が起こるかも分からなくて、一人で大泣きもしたり、たくさんの物にぶつかってしまうこともよくあります。けどそんな状況であっても、私をもっと母を支えよう、もっとがんばっていこうと思える理由は、今までもこれから母が私にくれる愛情と、母のことが大好きな私の気持ちがあるからです。

この「ウィズ・ユー」という本に出会って私は、改めて自分自身について考えることができたし、もう一度ヤングケアラーというものを理解し直そうと思いました。なかなか認知されない、目立たない「ヤングケアラー」という言葉。友達、先生にそう簡単に話すことはできない状況の子が、まだまだたくさんいると思います。実際、私も今すごく勇気を出して書いています。今、私が一番感じるのは、声を挙（あ）げる大切さです。一歩踏み出すというのは、ものすごく勇気が必要で、すぐにできることではありません。けど少しだけでも、小さな一歩が大きな一歩になるよう、私は声を挙げたいと思っています。これ以上私のような苦しい思いをする子たちを減らしたいです。私は将来、ヤングケアラーの子ども達を少しでも救うことが目標です。

（「with you」濱野京子／くもん出版）